

由良地区公民館便り

地域づくりにつなげる

環境共生教育の実践

京都府立大学 三橋俊雄

今日、地域において人と自然が深い関係性の中で共生してきた生活技術・生活文化を、次世代にどのように継承していくか、またその価値を当該の地域づくりにどのように活かしていくかが、地域から大学に求められている課題の一つといえるでしょう。

そうした想いを抱いて、一九九八年より宮津市養老地域において八年間、「野に出て生活を学び地域の光をデザインする」学外演習を、延べ二百五十名の学生の参加を得て実施してきました。昨年からは、宮津市の要請を受けて、由良地区にフィールドを移し、地域活性化につなげる学外演習を、夏季、冬季に開催しています。本年度は、二〇〇七年八月三日から七日までの五日間、環境デザ

ン学科三回生を対象として、「由良の魅力再発見とエコミュージアムづくり」を、由良地区公民館を拠点として地元の方々にお世話・ご協力をいただきました。演習には、京都府立大学学生十八名（教員一名）、滋賀県立大学学生七名（教員一名）、加えて本年より宮津高校建築科学生十三名（教諭二名）の計四十二名が参加し、はじめての高大連携の学外演習が実現しました。

今回の演習では、由良のかけがえのない「光・魅力」を、現代社会では消えかけている大切なもの、残していきたいもの、これからも発信していきたいものとしてとらえ、それらの「光・魅力」を由良の方々にも、また由良を訪

れる外部の方々にも理解してもらい楽しんでもらうための、「まちぐるみ博物館」エコミュージアム」であるとして、次の六つのテーマを掲げ、調査を行いました。「一班、九名」七曲八峠と奈具海岸の魅力調査、「二班、七名」由良の農具・民具の魅力調査、「三班、七名」宮川の自然、散策道の魅力調査、「四班、四名」北前船の歴史と船頭の心意気調査、「五班、十名」駅裏エコパーク開発構想の調査・提案、「六班、四名」由良の食文化調査・提案。

初日は、まず、由良地区を大学バスで巡りながら、山椒大夫屋敷跡、みかん畑、由良神社、如意寺、七曲八峠、グンゼ保養所など、由良の特色を概説いただきました。さらに、夜のミーティングでは、由良自治会、公民館、婦人会、実業会、歴史をさぐる会、食改善推進委員、農業委員の方々十五名にお集まりいただき、明日からの学生によるテーマ別調査に関して相談させていただきました。

四日から六日までが、実質的な調査です。一班の峠調査では、地元の方々の先導で、古道をふさいでいる竹や枝を斧やのこぎりで切り払いながら、茶屋跡の石垣や崩れかけた石橋に往時の峠道のにぎわいを感じ、また、鹿や熊、イノシシの痕跡を見つけたり、「ウラジロ（植物）」の群生に歓声を上げたりしながら、由良石の採石場跡を通って、KTR鉄道の橋脚がそびえ栗田（くんた）海岸を臨める「三枚橋」まで、約四時間の行程を無事踏査しました。二

班の農具調査では、トウミ（唐箕）、手押し種まき機、スキ（鋤）やクツゴミ（藁沓）などの昔の農具を調査票にスケッチし、その仕掛けや使い方などを聞き取りました。三班の散策道調査では、由良を流れる宮川、大迫川の自然と散策道の魅力を調査し、サワガニやサンショウウオを探したり、草ずもう、笹ぶね、ゼンマイ飛行機などの草遊びも体験しました。四班の北前船調査では、航海の安全を金毘羅

神社への絵馬奉納や女房たちの毛髪を奉納して祈願した、海に対する由良人の切なる思いを伺い知ることができました。五班のエコパーク構想では、駅裏の深田を利用した自然体験学習型の施設や空間デザインの提案を行いました。六班の食文化調査では、「あずきざい」「のっぺい」「てっぼう和え」「タニシの佃煮」など、郷土の料理づくりや新しい食材の提案を行いました。

このように演習では、由良の歴史や自然と共生してきた人びとの暮らしの中から、潜在的な資源・価値を発見し、地域内外の、例えば由良住民と都市住民や学生との交流を通して、その価値を学び、伝え、共有していくために、「地域の光をデザインする」「エコミュージアムによる地域づくり」という観点から、元気で誇り高い地域になっていただくためのデザイン（調査・解析・創造的提案）をおこなっています。



(1) 公民館長より由良の概要を伺う



(2) 地元の方々との調査打ち合わせ



(3) 古道・七曲八峠の探索



(4) 調査データの整理と発表の準備



(5) 地元の方々を前にした発表会風景



(6) 発表会での講評と意見交換